

“サツマイモの神様”が名誉市民に

白土松吉翁が茨城県那珂市で

干し芋研究家

まっさき ちひろ
先崎 千尋

民間人としては初めて

本年の1月18日に茨城県那珂市は那珂市中央公民館で市制施行20周年記念式典を開いたが、その席上、戦前から戦後にかけて茨城県内で「サツマイモの神様」と呼ばれてきた白土松吉（以下松吉）に名誉市民の称号を贈った。この式典には、松吉の曾孫の白土史生さんらが参列し、先崎光市長から名誉市民証が贈られた。同市での名誉市

民はこれまで国会議員や県知事を務めた人に贈られ、民間人としては初めてのことだ。松吉は、2019年にひたちなか市阿字ヶ浦に誕生したほしいも神社にも神様の一人として祀られている。

ここで松吉の略歴と業績を紹介しよう。

松吉は1881（明治14）年に那珂郡勝田村（現ひたちなか市）の那珂川沿いの打越家に生まれ、後に同郡湊町（現ひたちなか市）



白土松吉が名誉市民受賞

の白土家の養子になった。水戸農学校（現水戸農業高校）を卒業し、那珂郡役所に技手として入り、郡農会技手を兼務した。農会は戦前の主要な農業団体の一つで、農業の技術的・経済的発展と農事改良を目的とした団体。今で言えば、県の農業改良普及センターと農協の営農指導部を一緒にしたような組織だ。農会は国の方針により1943年に産業組合などと統合され、農業会となり、48年まで存続した。

名誉、地位、利益には目もくれず。東奔西走の日々

松吉が仕事をしていた那珂郡はもともと畑作地帯で、陸稲が盛んだった。陸稲は、夏に雨が降らないと収穫皆無になることもあり、不安定な作物だった。松吉はこれを救うのはサツマイモだと考え、着任早々サツマイモの増収栽培の研究を始めた。同時に、同郡前渡村村長の大和田熊太郎（ほしも神社で神に祀られた一人）とともに冬場の農閑期の副業としての甘藷蒸切干（干し芋）の製造を農家に奨励していった。国は、農家の収入を増やすために農商務省内に副業課を置き、役場や農会を通してその振興に力を入れていた。

松吉は郡農会で、サツマイモ増収技術の調査と研究のために篤農家や農学校、小学校などに試験地、試作地を設け、研究を重ねた。松吉の目標は千貫（3.75ト）取り。当時の平均反収の3倍だった。このために松吉は当時「ほら吹き松つあん」とも呼ばれていた。夏にはイモ畑で寝ていたこともあり、宿泊していた旅館の家人が畑まで夜食を届けていたというエピソードも残っている。

その甲斐があって、とうとう1926（昭和元）年に千貫増収法を確立した。その後も技術の合理化、作業の簡略化などの工夫を重ね、37年に1農家3人の労働力で1～2haのサツマイモ栽培ができる技術体系「千貫取り白土式甘藷栽培法」を完成させた。高うねとぶらんこ植えが栽培技術の基本だった。松吉が研究を始めて30年の歳月が経っていた。この年に松吉は『甘藷作論及栽培法』を出版した。当時、愛知県の丸山方作、千葉県の大澤松五郎と並んで、甘藷の三名人と言われていた。

大臣、知事を「君づけ」で呼ぶ

戦争末期の1944年に国は「いも類大増産運動」に取り組み、サツマイモの苗2000万本を首都圏に送る計画を立てた。苗は茨城県内原村にある加藤完治の日本国民高等学校などで育て、松吉はその先頭に立って苗づくりを指導した。その苗は皇居や皇族の庭園、首相官邸の庭にまで植えられた。

松吉は仕事に没頭し、湊町の自宅にはほとんど帰らずに、農会の事務所がある菅谷町の旅館で生活し、身なりは一切構わず、どこに行くのもはだしと自転車。サツマイ



松吉の顕彰碑

モ増産のために寝食を忘れて東奔西走の毎日で、名誉、地位、利益には見向きもしなかった。素朴な人柄とひょうきんな行動は農家の人々に愛され、大臣や知事でもすべて「君づけ」で呼んだと伝えられている。

戦後松吉は県農業会那珂支部長だったが、48年に第一線を退き、弟子たちが作ってくれた白土甘藷研究所（「那珂郡芳野村・現那珂市」で晩年を過ごした。

松吉はサツマイモ、干し芋だけでなく、那珂川沿岸の農業用水の一つ小場江堰改良工事にも私財を投じ、大きな功績を挙げている。55年には甘藷栽培の改良と水田灌漑用水路の新設の功績により黄綬褒章を受章し、亡くなる直前の56年11月には当時の那珂町役場構内に白土松吉翁顕彰碑が建立された（現在は市役所前の一の関ため池親水公園内に移設されている）。松吉の戒名は寶勝院耕盛松道居士、墓はひたちなか市栄町の華蔵院にある。なお、松吉に関する資料は、遺族から黄綬褒章を含めて那珂市立



ひたちなか市にある松吉の墓所

歴史民俗資料館（那珂市戸崎428-2 電話029-297-0080）に寄贈されており、私が執筆の際に収集した史資料も同館に寄贈してある。

松吉は昨年9月の市議会で名誉市民に選ばれたが、その理由は「松吉が生涯をかけて力を尽くしたサツマイモの研究は、那珂台地の農業振興に貢献し、戦中戦後の食糧難から多くの人々を救うとともに、那珂市が特産品『ほしいも』の一大産地として発展するための礎となった」ということだ。松吉は同市での5人目の名誉市民となった。

現在、茨城県の干し芋生産額は約120億円（推定）で、全国の99%。その中で那珂市、ひたちなか市、東海村が大半を占める。

終生サツマイモと暮らし、当時から今日までサツマイモ栽培農家に多大な恩恵をもたらした松吉が那珂市の名誉市民に選ばれたことは、私たちサツマイモ、干し芋の関係者にとってはうれしいニュースだ。「飲水思源」という言葉がある。「水を飲む人はその井戸を掘った人のことを考え、感謝すべき」という意味だ。現在ではサツマイモ栽培農家や干し芋生産農家で松吉のことを知っている人は少ないかもしれないが、この機会に先達の苦労を思い、感謝する必要があるはしないだろうか。

（参考資料 先崎千尋『ほしいも百年百話』茨城新聞社、2010、同『白土松吉とその時代』茨城新聞社、2012『干しいも事典』いも類振興会、2016）